

未来を断たれる理不尽さ 大口玲子

松尾あつゆきの『原爆句抄』（書肆侃侃房）が四十三年ぶりに復刊された。長崎生まれ、萩原井泉水門下の自由律句集である。

- ・ なにもかもなくした手に四まいの爆死証明
- ・ 子のほしがりし水を噴水として人が見る
- ・ 落葉する墓石の外にいるゆえに生きている

表現されているのは、あるべき命がそこがないという圧倒的な「不在」の実感である。「四まいの爆死証明」や「子のほしがりし水」という事物は、愛する者のあらわな不在を鮮烈に浮かび上げらせ、彼らが存在しないこの世になおも生き続けることの意味を自らにまた読者に厳しく問いかけている。「墓石の外にいるゆえに生きている」という弱々しい生の定義も、本来ともに生きるべき家族は墓の中におり、そこは明らかに隔たつて自分が存在しているという強烈な「不在」の意識から来るものだろう。

原爆で三人の子どもと妻を失うという「極めて異常な体験」（萩原井泉水）から生まれた松尾あつゆきの作品を、戦後七十年の今あらためて読むことの意味はどこにあるだろう。七十年昔、他者に起きた特殊な悲劇として、やりすごすことができるのか。人の命はかくもあつげなく理不尽に奪われるということ。この理不尽は、今もこれからもあり得るということ。私たちはこの理不尽をかみしめつつもつと怖れ、それを表現してもいいのではないか。

「文藝」夏号に掲載されている特別鼎談「震災と詩歌」は、詩・短歌・俳句それぞれの詩型から東日本大震災後の詩歌の言葉を取り返っている。震災直後から詩歌の総合誌などでも緊急の特集があったことは記憶に新しいが、この鼎談の記録はもともと共同通信社から配信されたものである。実作者であり評論も手がける平田俊子・川野里子・小川軽舟による鼎談が、震災から四年を経て企画されたこと、震災後に出版された句集・歌集・詩集という書籍を中心に議論されたこと、最初に掲載されたのが地方新聞であったということは、新鮮で意義深いことであった。震災時に海外にいた川野里子は、震災と原発事故後の日本を広い観点から捉え、短歌の「われ」の変容を鋭く指摘している。

・ 短歌が大事にしてきた「われ」が、原発事故という訳の分からないものをどう背負うのかというとき、一番目立つ形で浮かび上がってきたのが母たちだった。

・ 原発事故が起きて、放射性物質の半減期という途方もない時間を突きつけられたとき、それを最も切実に考えたのが子どもという未来を抱えた母だった。「未来を抱えたわれわれ」という新しい主語の誕生だと思いたいのです。

・（子どもという）未来のことを考える人は社会的な立場は弱くならざるをえない時代です。今すぐに利益にならないからです。だから、その問題を自分で抱えなくてははいけない。

「未来」と言った時、そこには再度の震災や原発事故、戦争も含まれてくるだろう。未来と向き合う川野の言葉は、かつて子どもという未来をその母である妻もろともに断たれた松尾あつゆきの慟哭にも響くものである。